

Title	民俗學の話(ベヤリング・グウルド著, 今泉忠義譯)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.4 (1930. 12) ,p.158(690)- 159(691)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19301200-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

適當なる標題の下に章節を分つて、詳細なる註解を施して、太子御一代の事歴と御事業を極めて親しみ易く吾人の前に提供されたことは、太子研究者のみならず一般國史研究家にまりて何よりも感謝である。

終りに方つて本書讀者の一人たる自分の紹介の餘りに簡略になつて、十分本書の内容に觸れ得なかつたことを深く御詫びする。

(山本光郎)

民俗學の話

(ベヤリング・グウルド著)
今泉忠義譯

英國の民俗學者にしてまた僧侶であつたベヤリング・グウルド(一八三四—一九二四)の *A book of folklore* の譯である。國文學に造詣深い譯者のことごとて譯文頗る流暢、少しも滯滞を感じない、羨むべき才筆である。内容は著者が坊さんであるせい、か、たましひ、「生れがはり」、「古代の神々」、「いけにへ」、「死」、「つぎがみ」、「彌渡」、「一寸法師」、「出産と結婚」といふ風に少し陰氣くさく主として祖先の持つてゐた宗教的信仰の遺存をごく解りよい文章で説明して呉れてをる。考古學にも趣味をもつてをるさ見へ、先づはしがきに古代人の遺物を含んだ他層を時代によつて別々に分けて考へることの必要を説き、それと同様、民俗學でも、資料が由つて以て來つた原層に従つて分類しなければならぬと説いてをる。自分は英國の古代史に闇いが、著者の人種觀には幾分の偏見がつき纏ふてをるやうに見へる。例へば「靈魂が動物の姿を假りるといふ考へは、明らかにアリヤン民族の將來したところでありませぬ。

この思想は婆羅門哲學の根柢を爲してゐるさ申しても、過言ではありますまい。ケルト民族ついでチウトン民族が東洋からかうした輪廻の思想を運んで參りました(四一頁)といひ、此重大な問題を軽く斷定し去つてゐるがこれは前代の民俗學者の印度尊重説にわづらはされてをりはしないか。著者の云ふ様にアリヤン民族と先住民の土俗の差がそれほど明かに區別せられるだらうか(例へば七七頁參照)少しく疑はざるを得ない。著者は一二二頁に「歐洲で行はれた人身御供は、ケルト族やチウトン族が、開化の程度の低い先住民の宗教的儀式と習合したものだらうと思ひます」と云つてをるが、これではあまりにアリヤン民族を優越せる高尚の人種と信じきつてをる傾きがある。私の近所に全く型貌を異にした者が、二人住まつて居ります。一人は、頬骨が高く皮膚は薄黒く髪は黒く精力絶倫で自他の觀念に乏しく、あらゆる方法を以て金を儲けることに没頭してゐると言つた様な男、今一人は髪は美しく皮膚は白く、爲事は遅いけれども着實で一口で言ふなら尊敬すべき男として、前の男などはさても比較にならないのであります(四頁)と云ひ、後者は著者に従へばアリヤン系の移住民だと云ふ。これはあまりにアングロサクソン流の唯我獨尊的考へではなからうか。こういう近代の學問が大分訂正した若干の箇所を除いてはベヤリング・グウルドの著書は、平易に民俗學の緒をしめした點に於て好個の小著である。讀者は一二三頁にいつさといふ最近流行の語が、遊戯において最も人の好まない役に當つた子供を呼ぶため使用されてをるのを發見しやう。小人と鍛冶屋の關係も詳細に述べられてをる(二二—二五五)。讀者は至る所日本の土

俗に似た類語を發見して人性の普遍性を今更ながら感嘆するだらう。今泉氏の勞苦で此良譯書が讀書界に提供されたことを心から祝し、弘く同好の士に推薦したい。(大岡山書店發行價壹圓八拾錢)(松本信廣)

日本民俗學 (中山太郎著) 大岡山書店發行

日本の民俗學界にその人ありと知られた中山太郎氏の論文を彙集せしもの、神事篇・風俗篇・歴史篇・隨筆篇の四に分類されてをる。今その前三篇を手にすることが出來たので此處に簡単な紹介を試みやう。

著者の序文中に斷つてをる様に此分類は明確なものでない。例へば歴史篇の中に含まれたるびす神異考、本邦に於ける高媒信仰、一つ物の研究等は、寧ろ神事篇に屬すべきものである。著者は民俗學に於ける先達者の一人であり、多種多様の方面に興味ある資料を蒐集されてをる。その論文は、種々なる雜誌に掲載されたもの、これを一々探したならば多大の勞力、時間、費用を犠牲にしなければならぬのを大岡山書店の盡力で手頃な書と纏められ出版されたのは、學界にとつて此上ない幸福である。折口氏の「古代研究」と云ひ一書肆の努力が學界の進歩に貢獻してをること多大なるを認めねばならぬ。たゞ忌憚ない批評を加ふれば本書の題名は日本民俗學研究とでもしてゐたゞきたかつた。日本の民俗學はなほ生成の途上にあり、人なほこれを學問の名をもつて目すべきやを疑つてをる。今までの研究はデヒレツタンティズムのため左右

せられる所が多い。眞正の學の組織され、建設せられるのは之を將來に待たねばならぬ。斯學の開拓者柳田先生さへ「民間傳承論」といふ名稱を使用せられてゐるのを見るにつけ、中山氏の論文集が「日本民俗學」といふ名で學界に提供せられたのは、時機尙早の感がある。著者は多くの珍しき資料を紹介され、まことにその民俗學に造詣深いことを示されてをる。たゞその資料から引き出される結論には吾人の承服し得ぬものがまゝある。神事篇にはまづ「雷神研究」に日本に於て重要な此雷神信仰について語り、次に「さんばい考」に於て田神さんばいの名稱は散飯サツの延言なりと論じ、「穗落し神」に於て鶴が稻穗を落したといふ傳説より、日本の稻は朝鮮より來たると論ぜられてをる。「御左口神考」に述べられた諏訪の酒神の研究は極めて興味多い。日本の民俗學はかゝる技術的方面における古代生活の神秘をあばき、もつて史家の迷夢を醒ますべきである。「宮座の研究」に於ては氏神が産土神にかはる時氏が新移住民と區別せんとしたる特權ある組合をさすなるべしと論じ、宮座についての種々なる資料を列擧され、「悪口祭」は、冬季における此特異なる祭について述べ、「動物犠牲考」は、原始宗教の重要な痕跡と思はれる動物供御の資料を集め、「氣多神考」に於ては、「ロシア語さけをケタさいふことより、氣多神は、鮭なりとて、鮭に關する材料を紹介されてをる。著者の列擧される資料は吾人にとつて甚だ重要であるが氣多神を鮭なりとする理由は吾人を納得させがたい。その他「神の裁き」にオルダリーの材料をあつめ、「物の周を廻る民俗」に日本の神儀に大切な此習俗を論じられてをる。「風俗篇」に於ては「蟹守土俗考」にヒコナギサ尊の生誕